二〇一五年七月七日　開催

《「留学生と語る」オープンディスカッション》

伝え合う文化と言葉

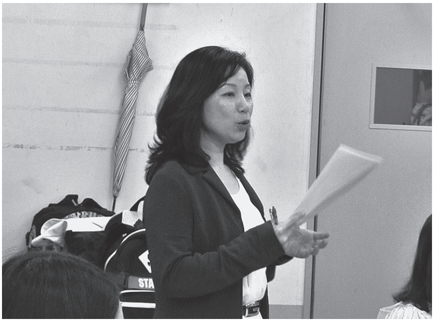
松本陽子
（執筆＝ミラー成三）

■ディスカッション協力……本学留学生別科「日本語インターアクション５」履修生一二名、「日本語教授法Ａ」履修生七名

■コーディネーター……松本陽子（本学留学生別科准講師）

第一弾のディスカッションでは、台湾、インドネシア、ベトナム、韓国からの留学生と、本学で行われている「日本語教授法」の授業に参加している日本人学生を話題提供者として迎え、話をしてもらった。その後各グループに分かれ、文化や言葉を伝えること・教えること・習うことなどについて自由にディスカッションをしてもらった。ここでは話題提供の様子を紹介する。

まず初めに、自分の国のステレオタイプにどんなイメージを持っているかについて、意見が述べられた。インドネシアからの留学生は、インドネシアの人はよく遅刻をすると思われていることを取り上げた。この点については、「確かにそう



コーディネーターの松本先生（本学留学生別科）

かもしれない」と認めながらも、「インドネシアではそれは遅刻にならない」ことを述べていた。一方で「日本では遅刻になるので、日本に来てからは遅刻しないように気をつけている」と、留学という経験を通して気づいたことを語っていた。台湾からの留学生も同様の意見があり、「台湾でも遅刻する人が結構多いし、それは悪い点だと思う」と述べていた。しかし別の台湾からの留学生は、「三〇分くらいなら遅刻ではない」、「一〇分くらいなら遅れても大丈夫」という意見が挙げられるなど、同じ国の人でも個人差があることが話された。

話題提供をしてくれた留学生と「日本語教授法Ａ」の履修生

話題提供者の話を熱心に聞く会場の参加者

留学生からは、自分たちが時間にルーズだと思われているという意見が多かったが、日本人学生からは逆に「日本人は時間に厳しいと思われている」という意見が挙げられた。しかし実際は、「そうではない人も多く、人による」ものであると述べられた。別の日本人学生からは、「時間に厳しいのは場合による」という意見に加え、例えば、「友達だと三分遅刻することはよくある」ことなどが話された。韓国も日本と似ており、「三分くらいなら遅刻じゃない」という意見が挙げられた。

留学生からは特に、留学による異文化体験を通して得た自分の文化に対する気づきが話された。一方で、意見を交わしていくうちに日本人学生からは『三分遅刻』という表現は日本ならではなのかも」という意見が出るなど、話題提供中に得た様々な気づきが話し合われる場面もあった。

続いて、自分の国の言葉を教える時に気づいたことについて話がされた。韓国からの留学生は、友人に韓国語を教えている時に「母語なので説明しにくい」ことがあり、「日本語では知っている単語であっても、それを韓国語で説明するのを困難に感じる」場面があった。他の国からの留学生からも同様の意見が挙げられた。ベトナムからの留学生は、「『お疲れ様』や『ごちそうさま』をベトナム語で説明するのが非常に難しい」と述べた。インドネシアからの留学生は、インドネシア語の使役を説明するのが困難であることに加え、「どうしてインドネシア語はこうなっているの？」という日本人学生からの質問に、自分が自然に使っている言語を説明することの困難さを知ったことなどが述べられた。日本人学生からも同様に、「いただきます」や「ごちそうさま」は何も考えずに使っているので、説明するのが難しいという意見が挙げられた。また「日本語を教える時に、それぞれの国の言語も分からず、また英語も通用しない場合、どのように教えていいかが難しい」という、日本語教授法を学んでいる学生ならではの意見も述べられた。また、発音に関しても様々な困難があるようで、台湾の留学生やベトナムの留学生からは、日本語を学ぶ時と自分の国の言語を教える時、共通していない発音があると非常に困難であるという意見が挙げられた。

続いて、外国人や異文化の影響を受けて変わった考えについて話し合った。「台湾ではみんな見た目をあまり気にしないので、自分もノーメイクで学校に行っていた」という台湾からの留学生は、「日本ではみんな見た目を良くしているので、自分も気にするようになった」という外見の変化について話した。韓国からの留学生は、「韓国でははっきり言うが、日本では強く言うと傷つくかもしれないから、練習して今は柔らかく言うようにしている」と、自身の言語使用の変化について述べた。日本人学生からは逆に、「日本人は自分の意見があってもあまり言わないので、もっとはっきり言うようにしている」や、「留学生の友達のようにフレンドリーに話すようにしている」などの意見が述べられた。その他にも留学生からは「日本にはいろいろな礼儀がある」ことが述べられ、日本の「礼儀」には注意をしているという意見が多く挙げられた。日本人学生からも海外旅行の経験が語られ、例えば、お店に入る時に挨拶をするというフランスの「礼儀」を学んでから、日本でもよく挨拶をするようになったという自身の変化が述べられた。

後半はグループに分かれ、ディスカッションを行った

最後に自分が勉強してきた外国語が将来どのように活かせるのかについて話し合われた。「言語が好きで色々学んできたが、今のところ（外国語は）日本語と英語しか話せない。でも将来はこの二つの言語を使って、外国語学校を作りたい」、「日本で中国語の先生か、台湾で日本語の先生になって、日本と台湾の懸け橋になりたい」、「日本でベトナム語を教えたい」「日系企業に関する仕事をして、ベトナムの貧困を助けたい」など、多くの学生から「自分の学んできた言語を使って仕事がしたい」という夢が語られた。その他にも具体的な夢ではないが、「やりたいことはまだ分からないが、英語を使っていればやりたいことが見つかった時にチャンスが広がると思う」など言語によって自らの将来の可能性を広げておきたい、という意見も挙げられた。